論　文

保育所実習における学生の自己評価に関する研究
―地方私立短期大学の事例を中心に―

渡　辺　一　弘

A Study about the Self-Evaluation of the Student in the Day Care Center Training: Mainly on the Example of the Local Private Junior College

Kazuhiro WATANABE

【要　　旨】

本研究は、保育所実習における学生の自己評価＝各自が保育所実習をどう捉えたかを、東北地方の私立Ｈ短期大学幼児保育学科の実習に関する文集「摂理と輝石」の内容分析を基に検討したものである。分析の結果から、以下の三点が推察できる。

第一に、「部分実習・責任実習」、「保育内容・保育技術」、「子ども」、といった保育所実習の中心的な活動部分について捉えた学生が最も多く、しかもその割合は、75％から80％を占めている。

第二に、実習指導が強化された１年目は、「子ども」、といった直接的なイメージが印象として残る項目の割合が増えている。

第三に、実習指導が強化された２年目から、「部分実習・責任実習」といった実習を行う上で把握しなければならない項目、中心的な活動項目の割合が30％弱から40％強へと増え、記述内容にも実習生の内面の変化が伺える。

Ⅰ．問題の所在

本稿は、保育所実習における学生の自己評価を、東北地方の私立Ｈ短期大学幼児保育学科（以下「Ｈ短大Ｙ科」と略記）の実習に関する文集「摂理と輝石」の内容分析を検討することで明らかにすることを目的とする。

保育者養成校における実習に関する調査・研究は、これまでも数多く行われている。例えば日本保育学会では、例年学会大会において主として「保育者の資質能力・専門性」「保育専門職の養成」という部会において、量的なデータを基に、分析の視点を絞った詳細な調査・研究が発表されてきた[1)]。しかし、資料の制限・限界も有り、学生の実習に関する素朴でダイレクトな意見を検討した調査は、意外に少ないように思われる[2)]。

Ｈ短大Ｙ科では、2001年より「摂理と輝石」[3)]という実習活動の記録集を文集として発行している。これは、幼稚園・保育所・施設での実習を終えた学生たちが、それぞれの実習で最も印象に残っている出来事を一例だけ[4)]取り上げて、文章として書き残してまとめたもの

で、字数は550字以上640字以内で、学籍番号・氏名・本文・実習先以外は題名も内容も自由に書き、編集段階で教員が誤字脱字等のチェックは行うが、内容については一切触れない。H短大Y科の実習スケジュールは、以下のように、幼稚園実習が最後の実習になっており、例年、幼稚園実習についての記述には、実習の総決算的な内容も見られる。

〈H短大Y科・実習スケジュール〉
・１年次冬休み－第Ⅰ期保育所実習
・１年次春休み－施設実習
・２年次夏休み前半－第Ⅱ期保育所実習
・２年次夏休み後半から後期－幼稚園実習

そこで、昨年度の中国四国教育学会大会において、平成18年度、19年度、20年度の計３カ年分の「摂理と輝石」における幼稚園実習に関する記述データを内容分析することで、学生の幼稚園実習についての率直な意見、他の実習も含めた実習全体の総まとめ的な意見等から、H短大Y科の学生の幼稚園実習における自己評価＝各自が幼稚園実習をどう捉えたかについて検討し、主に以下の三点を明らかにした。

１．３カ年を通して、印象に残っている出来事を一つに絞りきれず、複数もしくは全体像をまとめて記述する学生が、一定の割合（20％強）存在する。

２．実習指導が強化された１年目[5)]は、「子ども」「行事」といった直接的なイメージが印象として残る項目の割合が増えている。

３．実習指導が強化された２年目から、「園の方針・理念」「保育内容・保育技術」「部分実習・責任実習」といった実習を行う上で把握しなければならない項目、中心的な活動項目の割合が増え、記述内容にも実習生の内面（興味・関心）の変化が伺える。

これらの結果を踏まえて、今度は同じ資料の同じ年度の「摂理と輝石」における保育所実習に関する記述データを同じ方法で内容分析することで、学生の最初の実習である保育所実習についての率直な意見、Ⅰ期実習とⅡ期実習との違い、幼稚園実習との比較等から、同様に本学の学生の保育所実習における自己評価＝各自が保育所実習をどう捉えたかについて検討することを目的とする。

Ⅱ．事例研究の対象と方法

⑴　分析資料

分析資料は、平成18年度、19年度、20年度の計３カ年分の「摂理と輝石」（＊正式名称は『摂理と輝石　ゼミナール研究発表集』で、途中から、ゼミナール研究発表集と合冊化された）の保育所実習の記述データを用いる。分析資料については、先に示したとおり、幼稚園・保育所・施設での実習を終えた学生たちが、それぞれの実習で最も印象に残っている出来事を一例だけ取り上げて、文章として書き残してまとめたもので、学生が、題名も内容も自由に書いているのが大きな特徴である。

⑵　方法

本稿では、先ず３カ年分の記述データの内容を、以下の７つのカテゴリーに沿って分類し、記述内容の全体を概観する。

１「園の方針・理念について」
２「保育内容・保育技術について」
３「子どもについて」
４「先生について」
５「行事について」
６「部分実習・責任実習について」
７「その他、内容が複数に渡るものについて」

なお、内容が複数に渡るものについては、「その中で、ある項目についての記述量が過半数を占めているもの」と、「ある項目についての記述量が過半数を占めていなくても、全体の

中で中心的な内容的であると判断できるもの」を、カテゴリーの１～６の中で分類し、それ以外は７に入れる」とした。また、７の「その他、内容が複数に渡るものについて」は、更にその内容をすべて分類した。次に、これらの内容の中から、代表的な記述、特徴的な記述を取り上げ、学生が自己評価＝各自が保育所実習をどう捉えたか、どういうことを最も印象的に捉えたか、について検討し、考察を加える。特に、この３カ年において、学内の実習指導が強化され、学生の実習に対する意識が高いと推察される平成19年度入学以降の学生の記述内容と、それ以前の学生の記述内容の変化に注目する。

Ⅲ．結果と考察

先ず、実習生と実習園に関する基本的な情報を以下に示す（表１～３）。表１は、実習生の性別と人数である。男子学生の割合は10％前後で推移している。なお平成18年度、19年度、20年度、それぞれの学年の全数は128人、98人、105人で、保育所実習を行っていない各年度１人、２人、１人の学生は、一般企業に就職した学生である。表２は、実習園の所在地である。こちらも３カ年、ほぼ同じ割合で、Ｈ短大Ｙ科が在る八戸市内が約50％、八戸市外が約40％、青森県外が約10％である。なお、青森県外は具体的には、そのほとんどが岩手県と秋田県で、同県出身の学生が地元に戻って実習を行ったためである。実習園は、すべて私立であった。表３は、各実習生の記録の題名である。題名についても３カ年の割合はあまり変わらず、約50％～60％の学生が、「保育所実習を終えて」等の一般的な題名を選び、それ以外の学生が、記述内容に即した題名、例えば、「子どもへの言葉掛け」「反省点が目立った部分実習」等の題名を付けている。

次に、７つのカテゴリーに沿って記述内容を検討する。カテゴリーの内訳は以下の通りである（表４）。

表１　性別

	H18年度		H19年度		H20年度	
	人数	%	人数	%	人数	%
男	9	7.1	13	13.5	13	12.5
女	118	92.9	83	86.5	91	87.5
合計	127	100	96	100	104	100

表２　所在地

	H18年度		H19年度		H20年度	
	人数	%	人数	%	人数	%
八戸市内	62	48.8	47	49	51	49
八戸市外	51	40.2	35	36.5	45	43.3
青森県外	14	11	14	14.6	8	7.7
合計	127	100	96	100	104	100.1

表３　題名

	H18年度		H19年度		H20年度	
	人数	%	人数	%	人数	%
保育所実習を終えて	64	50.4	61	63.5	53	51
それ以外	63	49.6	35	36.5	51	49
合計	127	100	96	100	104	100

表４　内容

	H18年度		H19年度		H20年度	
	人数	%	人数	%	人数	%
園の方針・理念	5	3.9	2	2.1	2	1.9
保育内容・保育技術	37	29.1	23	24	23	22.1
子ども	23	18.1	24	25	17	16.3
先生	1	0.8	1	1	1	1
行事	3	2.4	2	2.1	4	3.8
部分実習・責任実習	38	29.9	26	27.1	45	43.3
その他・複数に渡るもの	20	15.7	18	18.8	12	11.5
合計	127	99.9	96	100.1	104	99.9

また、７番目の項目「その他・複数に渡るもの」の内訳は以下の通りである。

・平成18年度－20（複数（12）、全体を通して（５）、社会のルールを学んだ（１）、先生と呼ばれることに

ついて（1）、自分への挑戦（1））

・平成19年度－18（複数（10）、全体を通して（7）、自分自身について（1））

・平成20年度－12（全体を通して（8）、複数（4））

先ず、全体を概観してみよう。各年度とも、微妙にバラつきはあるが、ほぼ共通していえることは、一番多くを占める項目が「部分実習・責任実習」で、約30％弱から40％強の割合を占めること。次に「保育内容・保育技術」、「子ども」の各項目が約20％弱から30％強の割合で入っていることである。これらの項目は、実習活動のメインの対象・内容であるので、当然のことといえる。次にこれとは逆に、「園の方針・理念」、「行事」、「先生」の各項目については、４％以下と極端に少ない。「先生」の項目の少なさは、先生自身に対する印象というより、先生の「保育内容・保育技術」、「子ども」、「行事」、「部分実習・責任実習」に関する指導について取り上げた学生がいたので、それらに分散した結果であると考えられる。これらの状況は、各年度ともほぼ一致しており、複数年度を分析しても同じ結果であることがわかる。

複数年度の分析における各項目の推移状況では、「保育内容・保育技術」が年々減少傾向であるのに対して、「部分実習・責任実習」が年々増加傾向にあることがわかる。このことは、先に示した通り、この３カ年において、学内の実習指導が強化された結果、学生の実習に対する意識の高さの表れであると考えられる。

最後に、「その他、内容が複数に渡るものについて」の割合が約15％を示しているが、例年、最も印象に残っている出来事を１つに限定できなかったり、実習全体に対する思いのようなものを記述していた学生が存在するからである。以下、各カテゴリー毎に具体的な内容の一部分を抽出し、検討する。

１.「園の方針・理念について」

園の方針・理念については、園の特徴的な方針や活動の紹介が代表的なもので、以下のような記述があった。

「私が保育所実習の中で最も印象に残っている事は、座禅への取り組みです。釈迦の慈悲の心を根本に仏教保育を行っている○○保育園[6]では、毎朝決まった時間に、年少・年中・年長の子ども達が約10分間座禅を行っています」（H18年・A・女）（＊下線は引用者以下同様）

「私が実習を行った○○保育園の特徴は、英語のレッスンをしていたことです。レッスンでは、外国人の先生が来て教えていました。幼稚園では英語のレッスンをしているところもあると思っていたけれども、保育園で、しかも外国人の先生を招いて本格的に英語教育を行っているところがあるとは思っていなくて、大変驚きました」（H19年・B・男）

園の方針・理念については、いくつか触れている記述は他にも有ったが、「実習で最も印象に残っている出来事」という基準から、中心的に記述している事例は少なかった。

２.「保育内容・保育技術について」

保育内容・保育技術については、主として実習先で学んだ保育技術や保育に対する取り組み方と、実習先で自分が行った具体的な保育内容や保育技術についての二つに大別される。前者については、以下のように現場の保育者から学んだ、具体的な保育技術について記述されているものがある。

「私が最も印象に残っているのは、２歳児クラスの実習での喧嘩の仲裁です。物の取り合いや喧嘩などが多くて驚きました。実習の最初の方は、泣いている子がいたら、ただなだめるだ

けで精一杯で、子どもたち同士で何があったかなど聞いていませんでした。でも、先生方は泣いている子の話を聞いて、誰と何があったかを知り、泣かせてしまった子に対して、悪い事をしたということを理解してもらうように話していました。先生方の対応を見て、私は子ども同士で何があったかをお互いに聞き、仲直りを促すことが大事だと思いました。それからは、喧嘩をしている子がいたら、『どうしたの？』と聞いたりしましたが、どう言えば悪い事をしたということが伝わってくれるか、分かりませんでした。仲裁とは、簡単そうですが、とても難しいと感じました」(H19年・C・女)

後者については、以下のようなものである。

「一番印象に残っているのは、小麦粉粘土を行ったことです。子どもたちも先生方も興味を持って遊んでくれたことがとても嬉しかったです」(H20年・D・女)

このように、自分が実際に行った保育活動に対しての印象や、子どもの反応について記述している事例が多かった。

3.「子どもについて」

子どもについては、その園の子どもたちに全体に触れている場合と、一人の子どもとの出会いについて触れている場合がある。前者については、以下のようなものである。

「私が最も印象に残っているのは、保育園の子どもたちが、毎日違った表情を見せてくれたことです。なぜ印象に残ったかと言うと、表情や態度に子どもたちのそのときの感情が反映されているので、『今どんな機嫌』なのか見てとれたからです。そのため、子どもの機嫌が変わるその瞬間を見ることもできました。(中略)年齢や月齢によって、その表情や態度への出し方も違うことがわかりました。(後略)」(H19年・E・女)

後者については、以下のようなものである。

「(前略)２歳児クラスに入ってから、ずっと私はＡちゃんのことが気になっていました。私がＡちゃんに挨拶をしたり話し掛けたりすると、Ａちゃんは怒ったような顔をしたり、反発的な言葉を返してきます。(中略)最終日には、Ａちゃんの方から近づいてきてくれて、私は驚きの気持ちと嬉しいという気持ちで胸がいっぱいでした。子どもの本当の気持ちを理解してあげ、子どもの気持ちと保育者の気持ちが一緒になる瞬間はとてもすばらしいと感じました」(H20年・F・女)

保育所実習は２回に渡って行われるので、特に印象に残る子どもの成長や様子、言動について具体的に触れている事例が多かった。

4.「先生について」

先生については、現場の先生から学んだことについて感銘したことを記述した、以下のようなものである。

「私は、ある先生が教えてくださったことが忘れられず、今でも心に残っています。それは、人間の五感を活かして保育をするということです。一人の子の世話にとらわれず、背中を向けている、目には見えない子どもの事も、匂いや音などで、子どもの様子や変化を感じ取る事が大切だそうです。先生方はおむつ交換をしながら、歩き始めた子に目を配り、五感が当たり前のように活かされているなと思いました」(H19年・G・女)

「私が初めての保育所実習に行き、とても印象に残っているのは、先生方の子どもに対する接し方が、とても愛情にあふれていたことです。(中略)○○保育所の先生方は、子どもたちを分け隔てすることなく、平等に、とてもたくさんの愛情で、子どもに接していました」(H20年・H・女)

内容としては、２の「保育内容・保育技術について」と重複することが考えられ、そのため、最も印象に残るという点では、現場の先生を取り上げた事例は非常に少なく、各年度一人ずつの計３人の記述しかなかった。

５.「行事について」

行事については、第Ⅰ期保育所実習が冬休み、第Ⅱ期保育所実習が夏休みに行われるので、その時期の様々なイベントの準備について触れているものであったが、意外なことに、４の「先生について」と同様に、事例としては中心的に取り上げたのは非常に少なかった。例えば、以下のようなものである。

「(前略) 特に準備に携わったのは夕涼み会で、子どもたちのお昼寝の時間に看板になるお花を造ったり、当日の午前中には、テントを張ったり、椅子やテーブルを出したりしました。子どもたちの保育を行いながらの準備で、大変だなと感じました」(H18年・I・女)

「保育所実習では、もちつき大会や避難訓練などの行事を体験させてもらいました。もちつき大会では、年少さんから年長さんまでみんなで一緒に行うので、移動の仕方や、注目してもらう時など大変でした。しかし、先生方の様子やアドバイスなどを聞いて実践しながら行ったので、とても身に付きやすいと思いました。事前に勉強してから行うのもいいとは思いますが、やはり教えてもらいながら、その時に行う方が分からないことや間違っている点などを聞きやすいし、教えてもらいやすいので、大変かもしれませんが、とても勉強になりました。特に年少さんの子どもは、集団行動があまり上手くできないため、その場面に応じての対応が必要となってくるので、今までの実習で、学んだ事を発揮できたので良かったです。行事のときの誘導の仕方がよく分かりました」(H19年・J・女)

学生たちは、行事を通して保育技術を学んでおり、この点では、４の「先生について」と同様に、２の「保育内容・保育技術について」と重複する場合が考えられ、それが事例の少なさにつながったと思われる。

６.「部分実習・責任実習について」

部分実習・責任実習については、その大変さや苦労について触れているものがほとんどであるが、第Ⅰ期と第Ⅱ期の実習で若干、捉え方が異なる。第Ⅰ期では、最初の実習ということもあり、単純に緊張した、準備が大変だったというものが多かった。例えば、以下のようなものである。

「(前略) Ⅰ期の実習では、観察実習が中心で、園での子どもの様子や、子ども同士のもめ事が起きた時の先生の声かけの仕方を見ることが出来ました。Ⅰ期では、絵本の読み聞かせをしました。子どもの前に立つことは初めての経験だった為、とても緊張しました。しかし、子ども達は、私の慣れない読み聞かせを楽しんでくれて、とても嬉しかったです」(H20年・K・女)

これに対して第Ⅱ期では、指導内容に関する具体的なことについて触れているものが多かった。例えば、以下のようなものである。

「(前略) Ⅱ期では、前半に各クラスに入ることができ、年齢による違いも見る事が出来ました。後半は、３、４歳児の混合保育だったため３回の部分実習、２回の責任実習ではとても大変でした。私自身が予測していた子どもたちの動きとは全く違う動きを子どもたちが取っていたので、私も焦ってしまいました。指導案の立て方、時間配分の予想が甘かったことを反省しました。(後略)」(H19年・L・女)

この６「部分実習・責任実習について」の事例が最も多く、次の７「その他、内容が複数に

渡るものについて」においても、部分実習・責任実習に関する記述があり、改めてこれら部分実習・責任実習が保育所実習における中心的な存在であることが改めてわかる。

7.「その他、内容が複数に渡るものについて」

その他、内容が複数に渡るものについては、内容が複数に渡るものと、全体を通しての記述が大半で、設定したカテゴリー以外の事例では、以下のようなものがあった。

「この保育所実習を通して、保育の事だけでなく、マナーや礼儀など社会に出るうえで必要な事も学び、自分に足りなかった部分に気付く事が出来ました（後略）」（H18年・M・女）

実習を通して、保育以外に様々な事を学んだ、と記述している代表的な事例である。

Ⅳ. まとめ

以上の分析結果から、平成18年度、19年度、20年度の計３カ年のＨ短大Ｙ科の学生の保育所実習における自己評価についての検討をまとめると、以下の三点が推察できる。

1.「部分実習・責任実習」、「保育内容・保育技術」、「子ども」、といった保育所実習の中心的な活動部分について捉えた学生が最も多く、しかもその割合は、75％から80％を占めている。

2. 実習指導が強化された１年目は、「子ども」といった直接的なイメージが印象として残る項目の割合が増えている。

3. 実習指導が強化された２年目から、「部分実習・責任実習」といった実習を行う上で把握しなければならない項目、中心的な活動項目の割合が30％弱から40％強へと増え、記述内容にも実習生の内面（興味・関心）の変化が伺える。

１については、保育所実習が、幼稚園実習や施設実習と比べてⅡ期にわたる実習であること、例年Ｈ短大Ｙ科の卒業生の80％以上が保育所（園）に就職している点との関連性があると思われる。

２については、先に分析検討した幼稚園実習における自己評価についての結果と、ほぼ重複する内容となった。

３についても、２と同様に幼稚園実習における自己評価についての結果と、ほぼ重複する内容となった。

実習指導が強化される前とそれ以降では、わずかながらではあるが、実習の中心的な部分への意識が高まってきたといえる。また全体を通して、同様の方法論で分析した幼稚園実習における自己評価についての分析結果[7]とも似た傾向を示した。ただし、これらの結果は、各年度の学生の学力差の問題、全体の人数の相違、その年度の友達の記述に影響される等々も考えられる。また資料の限界として、資料の性格上、学生は自由に書いてはいるが、負のイメージについては、あまり記述しない傾向が伺えた。今後の課題としては、上記の問題点を払拭するだけの方法論－例えば実習生に対するインタビューの実施等－を取り入れ、新たな補足資料を用いての検討が必要であろう。

【註】

1）例えば、2008年度の日本保育学会大会の発表においても、以下のような題目の研究発表が行われた「保育園実習における学生の学びの変容過程に関する一考察－保育所実習と保育実習Ⅱの自己反省調査の分析結果に基づいて－」「保育者養成における自己の『実習課題の取り組み』Ⅱ」「保育士をめざす短大生がえがく保育所・施設の子ども像と保育士像－その４・実習前後の保育士像比較検討－」「教育実習における指導計画案の立案指導について（４）－幼稚園における指導－」「実習教育における教授－学習過程成立の要素」等々（日本保育学会第61回大会準備委員会　2008,『日本保育学会

第61回大会発表論文集2008』221－223、231－232頁)。

2）例えば、註の１）で示した研究発表も、すべて詳細なアンケート調査を基にしたものであった。

3）「摂理と輝石」の名称の由来については、2001年版の前書きのところに当時の学科長兼実習委員長が以下のように触れて、説明している。

「人間は、生まれてくる環境も、性格も、能力も、容姿も、貧富等々、何一つ自分で選ぶ事の出来ない『摂理』の中に存在している事を、学生たちは実習によってあらためて知ります。また、様々な人達との出会いにより、生きる事の喜びと難しさを現実として実感することにもなります。これは、学生達（人間）にとって大問題でありますが、未知だった世界に接し、人間の理解を越(ママ)えた、けれども『意味のある宿命』として受け止めなくてはならないことを漠然とでも知りうるようです。様々な実習状況の中で、学生達は無意識に涌いてくるアガペ（無償）愛により、人間への接し方を和らげています。

施設で暮らす方々と接する事が出来た時、その方々が学生の心に変化をもたらすこと、これも『摂理』だと思います。学生たちが実習に入る前に抱いていた気持ちは、実習の終わる頃には格段に変化していきます。この変化の過程と広がり、そして人間として育ってゆく様子が文集の中には数多くみられます（後略)」。

4）但し、例年、一つに絞れず、複数の例を紹介する学生も少なからず見られる。

5）平成19年度卒業の学生より、実習指導が強化された。具体的には、学内と附属幼稚園で行う「模擬保育」の活動と、これに関連する「指導計画論」の講義をより充実したものにするため、講義形態・内容を大幅に手直しした点である。「模擬保育」とは、Ｈ短大Ｙ科独自の実習事前指導である。１年生の後期と２年生の前期に、それぞれ各ゼミを２グループに分け、各年度のテーマに従い部分実習の指導案を作成し、ロールプレイング（模擬保育）するものである。１年生は専門的な知識がまだ不十分な状況であるので、実施体験をさせることに主眼を置き、学内で学生を対象に行い、その体験を第Ⅰ期保育所実習に活かすのが目的である。２年生は、講義で学んだことを実践の場で活かすことを目的とし、先ず学内で学生を対象に行い、次に附属幼稚園の協力を得て、実際に附属幼稚園で園児を対象に行い、その後の第Ⅱ期保育所実習、幼稚園実習を視野に入れたより実践的な学習として捉えている。

6）保育所（園）名については、本稿ではすべて仮名とする。

7）渡辺一弘　2010,「幼稚園実習における学生の自己評価に関する研究　－「摂理と輝石」の内容分析を中心に（Ⅱ）－」『教育学研究紀要』(CD-ROM版)　第55巻　中国四国教育学会編　344－349頁。

【主要参考文献・資料】

片桐隆嗣　1997,「質的調査の技法」『〈社会〉を読み解く技法』北沢毅・古賀正義編、福村出版　23－44頁。

光星学院八戸短期大学　2000,『桜林学苑史《八短大30年の歩み》』。

光星学院八戸短期大学幼児教育学科　2001,『摂理と輝石』。

全国保育団体連絡会・保育研究所編　2009,『保育白書2009年版』ちいさいなかま社。

橋元良明　1998,「メッセージ分析」『人間科学のための研究法ハンドブック』高橋順一・渡辺文夫・大渕憲一編、ナカニシヤ出版　75－86頁。

《付記》

分析資料の引用に際しては、一部に句読点を付し、誤字脱字は訂正した。